

感覚のフォークロア —不潔意識と時間感覚について—

齋藤修平

はじめに

フィールドワークと称して町や村を訪れ、そこに暮らす人たちの日常生活にできるだけ迫ってみようという営みを繰り返していると、いつまにか装着されてしまった商売上のホスピタリティーや、「これ（この出来事）は民俗なのか、あるいはそうでないのか」ということを巧みに識別する自身のまなざしが気になってくる。自分自身は、固有のまなざしで対象を見て、測っているつもりになっているが、実際には近年の民俗学が求めたと思われる、基準化された大きな枠組みからは、そうそう逸脱していないことになっており、これは「まづい」という気持ちから調査ではいきおい自分にとっての新しい民俗探しをというような気持ちでインタビューを実施することになる。先般、久しぶりにここしばらく調査でご協力願っている入間郡毛呂山町を訪れて、衛生感覚や時間感覚といった、変化した感覚（改良された感覚）をめぐっての課題を追求してみたので報告しておきたい。

いささか私事にわたっての話題で恐縮だが、少しばかり離れたところの梨園に六年ほど前に長女を連れて梨狩りに行ったときの事件を伝えたい。いわゆる観光梨園で、長女が用足しをしたいというので、筆者は梨園の隅にある便所に連れていったのである。さすがはお客商売と思うぐらい、便所の清掃は行き届いて便器もその周りも雑巾がけされており汲み取り式ではあったがそれなりに好感を持つことができた。しかし、何故か長女は便所を覗いた途端に出てきてしまった。汚いとか臭いというようなことで、言ってみればショックを感じたようである。この感覚差は理解はできるものの、近くに用足しする場所がここにしかない以上は飛び出してくるほどのことではないな、とも思ったわけである。切羽詰まったときだったから、便所の伝統を教えるつもりもなかったが、「きれいなトイレだと思うよ」とだけは述べた。が、水洗トイレしか使用したことのない子どもにとっては筆者の言葉は理解を越えていたわけで、仕方なく急いで梨園を出て近くのガソリンスタンドに連れて行って、事件の解決をみたわけである。水洗トイレが普及して、それに慣れてきてはいるが、筆者は多少の異和感を押さえておけば、郷愁の感覚から汲み取り式便所に戻ってはいける。長女は当たり前だけど戻っていけるところだなんて思ってもいない。この感覚差を理解するには、生理的、本能的なものだ、といった単純なものいいで解決すべきことではないようだ。多分、この差異は社会的な文脈の上で理解していくことが必要なんだろう。

筆者だってインタビューを受ければ「昔の便所は今のと比べれば確かに不潔だったと思う。でも、それに慣れ親しんでいた子どものころには特別に嫌な感覚はなかったし、あったとしてもどうにもならない時代だったから」という風に答えるだろう。でもあの汚い汲み取り式便所を汚いと感じたのは、水洗トイレという世界に出会った以降に生まれた感覚ではなかったか、というのが感覚差を問題にしたくなった理由である。便所の不潔と清潔を区画する線分のはじまりはどこからなのか気になり、清潔という感覚の誕生後に不潔という感覚が誕生したんだ、というようなことを家に戻っ

てから長女に語ってみたがもちろん、こういった論議も当時の長女はまったく受つけてはくれなかった。

そんな事件以降、筆者が実施しているフィールドワークの課題の一つに「不潔（意識）の誕生」というものがある。朝シャンをはじめとした清潔志向（不潔の囲い込みと排除）というベクトルのはじまりと行く末を考えていく上でも、いつごろから不潔という感覚が意識の上に立ち現れたのかを調べるおくことも大切なことかな、と思ったからである。調査地に暮らす何人かの方々から不潔あるいは衛生をめぐるコメントを集めてみた。人々の不潔意識とはどのような時刻に、どのような政治性の下（少し大袈裟かな）で登場してきたのかを考えてみたいと思っている。この小論では、スケッチ程度のものであるがこの領域の可能性の検討という点を訴えておきたいと思う。

それから、数年前のことだが、この町の人たちと一緒に海外に旅行したときのことである。集合時間に少しでも遅れると、口やかましく注意する方がいた。いわゆる時間厳守という姿勢である。その時の光景が印象に残り、やがてこの町の時間感覚というものが気になりはじめたのである。町の人たちと時間について会話を交わしていくと、毛呂時間とか川角時間（あるいは玉林寺時間）などと時間の前に旧村名や字名をつけて、自分たちの時間感覚をいささか自嘲げみに振り返りながら説明してくれるが多いことに気がついた。「つい、近年まで会合の時になると時間（定刻）に集まるのは半分強で、遅く行くのが美德というような感があった。このごろでも任意の会合では遅れる人がいる。特に農家の人に多い。昔は偉い人が遅いといったが、この頃は偉い人は大体時間を守っている。」というようなことを口やかましく遅刻を注意する方（昭和7年生）から旅先で伺った。農家の人は時間を守れない人（時間にだらしない人）が多いというのが立派な勤め人であるこの方の意見であった。時間厳守という感覚は取りも直さず、遅刻意識の誕生を意味してくれるわけだが、一昔前の農家の時間感覚を、これまたスケッチ程度となるが述べておきたいと思う。

1 不潔意識の誕生

まづは、事例の提示を行うことにするが、こちらでは用足し後や食事のときの手洗い、風呂、便所、洗濯、体の汚れぶり、食器の管理などの項目を用意して、清潔・不潔の考え方を引き出そうと12名の方々に質問を繰り返し行った。いわゆる一昔前の衛生意識や衛生面から見た生活実態を明らかにするためには、もう少し多く質問項目を用意する必要があると思われるが、今回は限定的なやりとりを行った。

事例1 「衛生巡視は春と秋の年2回ほど、大正時代より続いて実施されていた。巡視日が決まると役場より回覧で知らされた。各家では巡視日の数日前より家の内外の清掃をした。とくに晴れた日に家具一切と畳まで外に出して干した。長さが2、3メートルぐらいの篠を五本ぐらい縛って、箒をつくり蜘蛛の巣や埃を払い、床下まで掃除をした。縁の下などは小さい子どもが丁度いいので、入らされて働かされた。午後になると畳の埃を細い棒でトントン叩く音が近所から聞こえてきた。農家では春に畳を上げると、物置などに積み込み、秋になってから敷き込まれる。その間は部屋は養蚕に使われた。家具を元の場所に戻して終わるが子どものときには、片付けるといままで見たく

ともないものが出てきて、一日使われても楽しかった。巡視は、役場から一人、区長、消防分団長、そして衛生委員が二名で各戸を廻り、家の内外、とくに下水と火の元を見て廻り、衛生委員宅にて反省会をして、とくに良く出来ている該当者があれば、申請して役場より後日、「衛生模範の証」と書かれた木札（4センチ×12センチぐらいだった）いただき、玄関口に貼った。木札をいただくと、常に清掃に気をつけなければならないので、大変だったがこれも、自分のためということで皆さん良くやってくれた。昭和40年代より昔の家も建て替えとなり新しい家が増えてきたので、50年ごろには巡視はなくなり、昭和60年には衛生委員は廃止された。」（大正6年生）

*衛生巡視の前日にはいわばハレの気分の下で大掃除が実施されいたようである。衛生委員の役割、「衛生模範の証」が発信する象徴的な意味はどのようなものだったのだろう。模範の家を設定することは、そのまま村で模範とはならない家をも明らかにしていったのだろう。模範となる家からもっとも遠くに位置する家はどのような評価を地域で受けたのか、気になる点である。衛生役員二名らは、下水と火の元までも観察の対象としたわけだから、かなり家の深部を見透したに違いないだろう。衛生巡視という語彙を使つての衛生的（清潔）と非衛生（不潔）の分割がなされていったことが推察できる。

事例2 「小学校時代、小便の後や食事の前の手洗いなどあまり先生は細かく指導しなかった。友だちのするのを見よう見まねで覚えてきた。当時はハンカチを持っている者はいないので、濡れ手をおっ振って自分の着ているもので拭いてすませていた。私の家には常時、5人の女工さんがおり、家族が多かったので風呂水の取り替えは毎日していたが、小さい風呂桶で顔を洗って出入りするだけでも、はじめに入るのと終わりに入るのとではまったく違っていた。今考えると不潔そのものだった。男は少しの湯でも頭も洗えるが、女は休日に日中お湯を沸かして洗っていたのを覚えている。小人数の家などでは2、3日は水を足してタテッカエシ（湯の沸かし直し）だった。下着などは汗をかかない時は三日ぐらいは平気で着せられた。洗濯は盥で手洗いなので、中々重労働だった。私の家の近くには小川があったので、一年中川に持って行き、すすぎ洗いをしていた。小学校のとき、学生服で通学するのは組で一人ないし二人だった。その他の人は着物に下駄や草履を履いて通学していた。着物らの袖で鼻水などを拭いて、白く光っている着物を着ている子どももいた。靴下や足袋などは寒いときだけで少し暖かくなれば、みんな素足だった。貧しい生活だったので不潔だ、不衛生だと考える余裕もなかったのが実態だった」（大正6年生）

*不潔だ不衛生だという考えは豊かになってから、つまりは身の回りが行き届くようになってから、振り返りながらあらためて自分たちの暮らしぶりに「不潔」のラベリングを行っている。ラベリングの対象は、食事前の手洗い、風呂、洗濯、下着など生活諸場面に行きわたっていくようだ。ハンカチとちり紙を学校に持参するような衛生的な指導はどのあたりからはじまったのか気になる点である。

事例3 「便壺が浅く、汲み取りがまめに行われていない時は嫌な感じだった。便壺に半分ぐらい溜まるとまめに汲み取る家があった。そんな家は臭いはあってもこういう便所には今でいう清潔感があった。とにかく、タメ（糞溜め）の周囲がきれいになっている家は褒められたものだった。ダラシガナイと言われる家はきまって便所が汚かった。それから便所が高床になっていて便槽との差が大きいと、なんとなく清潔さを感じたものだった。便槽が密閉されていて光りが入らないで、暗くなっていると何となく清潔感があった。便所の後で手を洗わないことに不潔感さはほどなかった。

金盥に水を汲んでおき、手でその水を掻いだしながら洗っていたが、この水が汚れていると手を洗わないことがあったから、手よりも水に不潔さを感じていたと思う。風呂の水の取り替えは三日に一度ぐらいであった。とにかく、井戸と風呂場が離れていたから、取り替えが大変だった。手桶に十杯ぐらいは入れなくてはならないから、むしろ水の継ぎ足しで間に合わせるが多かった。風呂の水は翌朝には洗濯水として使われていた。風呂の水はまだ暖かくて汚れがよく落ちた。洗濯で減った分を足していた。一度に風呂の水を抜くと、大変だった。水溜めがすぐに一杯となって風呂の水が処理できないことになってしまった。風呂の水は堀に直接流すことはなく、一度は水溜めに溜められた。この水溜めの水はさらに便壺をきれいにするのに利用されていた。継ぎ足しで風呂の水を足してすませっていくと、やがては風呂の下に溜まった汚れがヌルヌルしてくるようになる。こんなときに、「風呂が汚れた」と言って、汲み替えた。垢が表面に浮いたとき、風呂の下がヌルヌルしたときには何となく、不潔さを感じて、水の取り替えとなった。ただ、昭和初期のころの生活は、割合と清潔な暮らし方をしていたと思う。きたない、と言えば便所と外のどぶぐらいだったと思う。「ボウフラがわく」と言えば汚い感じて、「ウジがわく」と言えば不潔という感じだった。お勝手の流し廻りと便所廻りがきちんとしている家は好感を持たれていた。家にいるとき、ちゃぶ台に落ちた飯粒を平気で拾って食べていた。「もったいない」という親の口癖で大きくなったから、拾って食べるものだと思っていた。昭和初期の農家では、拾って食べるようなことは、精神的な美德とさえ思われていた。学生になって寄宿舎生活に入った途端に「きたない」と怒鳴られたことを覚えている。食事前の手洗いをしなかったこと、指をなめること、箸をなめること、食べたお茶碗でお茶を飲むことも「きたない」と言われた。気をつけたが、長い間の習慣でつい繰り返すことが度々あったので上級生から「いやしい奴」と蔑まれて、食事をするのが怖くなったことも覚えている。今の中学生の年齢だし、出るに出られない寄宿舎生活だったからあわれなものだった。農家の常識と都会の常識には当時、かなりの違いがあることを思い知らされた。「もったいない」という思いが都会の人には「きたない、いやしい」と映ったわけだ。とにかく当時（昭和の初期）、農家では拾って食べることは美德のように思われていた。私は今でも「田舎者」という呼び方には差別的で怒りを感じている。」（大正15年生）

*タメのまわりがきれいだと、世間から褒められたということから、タメのまわりや流しの様子が評価項目であったことが示唆される。また、汲み取り式の便所も便槽の高さなど構造によって、いわゆる清潔感を感じたり、そうでなかったりという感覚はあったと理解される。学生時代の寄宿舎生活では食事のマナーなどにも評価が及び「きたない」とか「いやしい奴」というレッテルが上級生（先進）から新入生（後進）へ貼られていたことが判明している。いわゆる田舎での常識が都会では非常識と映ったわけである。きたないという観念は、都会から田舎を見ての視線のなかにあり、いわば「きたない」あるいは「不潔」という観念は都会（新しい社会）と田舎（古い社会）という優劣関係から導きだされた観念ではなかったか、ということを示唆してくれる。

事例4 「昭和40年から50年ごろは農家の改築が進んだ。台所には水道が流しのところまで配管されて、食器なども使った後すぐに洗うようになった。それまでは、膳箱に食器と箸は使った後にそのまま入れて、次の食事のときに使っていた。食器が汚れたときになって、洗うという風だった。時によると、残った副食なども食器に入れたままにして、膳箱に入れることもあった。今考えると

非衛生だったと思う。昔の風呂は土間の片隅にあって、三方が土壁で囲まれ、壁の下半分がセメント壁になっていた。風呂桶は木造りだし、洗い場も木の簀の子が置いてあるだけだった。風呂場は開け放しだから寒くて、冬は風呂桶のなかで体を洗ったから後に入るほど、湯が汚れた。また、風呂水は二晩目は、温まっていた湯の沸きが早く、燃料の節約になるので水を替えなかった。昔の便所は母屋と別棟の屋外に汲み取り式だったから、便所に入って下を覗くと溜まった便が見えた。夏には蛆が湧いているように見えた。臭いもした。汲み取った糞尿は田畑に施肥したが回虫の卵などは乾いた土と一緒に風で散って、生野菜などから回虫が伝わりと言われていた。おとし紙は古い新聞紙であった。小便のときは手を洗うことはなかった。昭和9年から10年にかけての農村不況のときに東京から人糞を共同購入して田畑に撒いていた。駅に着いた貨車から人糞樽を運搬するわけだが、樽の栓が緩んでしみだした人糞が手足や衣服について、臭いが体にしみついた。肥料代の節約になったので当時はそれほど苦しめていなかったが、今考えると金には代えられないほど不衛生だったと思う。農家は土との関係で手足や顔、衣類が汚れることが多かった。盥いの中で洗濯板を使った洗濯は手間もかかって大変だった。汗になったり汚れたりしたときに、洗濯していた。今は自動洗濯機があって、下着は毎日洗濯して取り替えるようになった。一番汚れた仕事は、煤掃きだった。昔は農家で、藁葺き屋根で台所では毎日薪を燃やした。煙突がなく、屋根の棟上には気抜きと呼んだ煙出しがあった。煙りは屋根裏にまわって気抜きから出ていった。そのために、屋根裏には煤がまっくろく溜まった。春と秋の大掃除には屋根裏に上って竹笹で作った箒で煤を払い落とした。手拭で頬を拭いた上に帽子を被ったが、顔から衣服全体が真っ黒くなって、風呂に入ってからようやく煤が落ちた。煤を吸い込んで衛生上はよくない仕事だったと思う。」(大正5年生)

*不潔の感覚は、食器洗いの習慣にもおよんでいる。いまでこそ食器は毎日洗っているが、少し前まで、水道が普及する前は食事毎に洗うものではなくて、汚れたら洗うという感覚であった。この汚れたら洗うというときの、汚れの基準はその家によって違っていたのだろう。風呂での体の洗いも冬は風呂の中で洗うというのが習慣だったから、確かに湯は汚れしまうわけである。恒例の煤掃きが衛生上問題だと振り返っている点も注目していただろう。

事例5 「昭和26年ころだったが、クラスに「不潔な子」と言われた女の子がいた。その子が「不潔な子」と呼ばれたのは、髪にシラミが住んでいたからだった。そのころは、女の子もあまり髪を洗う回数も少なかったし、男の子も頭にシラクモが多く、タムシも多くいた。あおい鼻を垂らして、それでいてチリ紙もハンカチも持っていなかった。昭和30年ころまでの銭湯は湯が少なく、湯船から湯が溢れてはいなかった。赤ん坊は小便も糞も湯船にしてしまうので、糞はとろけそうになって、ふわふわと浮いていたことがあった。子どもたちは銭湯が遊び場であったから、もぐりっこなどをしていた。今から思うとお湯は濁っていた。菖蒲湯や柚子湯のときは楽しみで、柚子は食べたり、菖蒲は噛んだり草笛にしていた。町中には公衆便所が少なかったので大人も婦人も道の端で大小便をする人が多かった。婦人のかい、そして妙に白いケツには随分と驚かされた。便所の紙も昭和30年ころは、どこの家でも新聞紙が多かった。ダイジンの家は新聞紙も古いのが多く重ねられており、ケツを拭くのにやわらかく、うらやましかった。紙不足だったから、新しい新聞紙は少ししか使えず、よく揉んで柔らかくしてから使った。新聞紙は昭和40年代に入る前は、魚の干物、さつま揚げ、豆腐、油揚げなどみんな新聞紙で包んでいた。今のように新聞のページは多くな

く、広告に入ってくるチラシも少なかったから、紙が足りなかった。」(昭和17年生)

*話者は東京生まれで、戦後の東京の様子をよく覚えている。もうすでに「不潔」という語彙が学校に行き渡っていたことが判明してくる。シラミ、タムシといったものと馴染んでいた社会があったわけだが、髪にシラミがいると、すでに不潔な子として扱われていたわけである。不潔が一種の烙印となって子どもの世間で通用していた時代である。

事例7 「昔は、便所は外が普通で、家の中にある家は部落中で一軒か二軒であった。家の廊下の隅にある便所はカミゴウカと呼んでいた部落があった。風呂も便所も外だったから寒いときに風呂に入るのは嫌ったものだった。風呂水は二晩ぐらいは足しながらだった。便所の手洗いは殆どしなかった。畑仕事で手が汚れていても、手をたたいて汚れを落とすようにして、着物の縁でこすってから食べた。女性との性行為でも昭和20年代、赤線に行っても風呂などなかったし、手も洗わないで帰ってきたものだった。」(昭和7年生)

*不潔とか清潔を話題にしていくと、手の汚れ落としの様子や性行為の際の入浴や手洗いというところまで、振り返って、昔の不潔さを感じている。

事例8 「昭和52年に嫁いだ娘が子どもを連れて家に戻って来たとき、孫たちが汲み取り便所を怖いといって使用するのを嫌がったことがあった。昭和28年だったが、便所にブリキの手洗い容器を買ってきて吊した。下に出ている棒を押すと水が出てくる仕掛けだった。風呂の水は今でこそ毎日取り替えるが昭和30年代の前半までは手桶で井戸から運んだので一日中雨が降ると、減った分だけ水を足すようなことはよくあった。髪洗いと下着の洗濯は、暑気が厳しいときは、毎日だった。冬は下着は2、3日は着ることもあった。手足の汚れは畑仕事より水田の仕事方が汚れるので他所に出かけるときは、手足をきれいにするは大変であった。昔、ある病院で看護婦さんが手の爪を亀の子たわしで洗っているのを見てから、外出するときにはたわしで手を洗っている。」(昭和6年生)

*農家の便所を怖いといって使用を嫌ったという孫の話は驚きであり、話者にはショックであったという。それから便所の改築を思いたったという。「世代の他者」からの指摘によって、便所の不潔さを意識させられたのである。

事例9 「風呂水は2、3晩で取り替えていたし、髪洗いは月に1、2回ぐらいうどんのトギジル(茹でたときの汁のことか)、ヒナツチ(粘土)を使っていた。下着や足袋などは5、6日に1回まとめ洗いをしていた。手足や顔の汚れだが、大便のときは手を洗っても小便のときに手を洗うことはあまりなかった。手足の汚れも顔の汚れも風呂の水を使って洗っていたが、セッケンを使うと見違えるようにきれいになったことを覚えている。あの当時は草屋根(麦殻と茅)の母屋の葺き替えや補修のときに屋根屋さんのお手伝いとして、屋根裏で竹針の挿し替えなどで働くと、顔、手足、口、鼻の中まで油煙とワラのごみでマッククロスケ(真っ黒黒助)であった。お湯でセッケンをつけて洗っても落ちないほどのひどい汚れかたであった。顔と手を洗ってからお茶飲みしたものだ。田圃の畦にクロツケするときも手足を使っ

て十分に土をこねあげたので、汚れた。牛や馬を使っての田掻きもかなり汚れたものだった。昭和20年代のころは、畑の野菜や麦などに便所の下肥を使っていたから、今から思うと不潔だが箱膳での食事で、ご飯を食べたお茶碗にはお湯をそそいで箸でかきまわして飲んできれいにして洗わなかったような生活をしていたから、不潔とか不衛生とは思ったことがなかった。」(昭和6年生)

*用足し後の手洗い習慣、農家仕事での汚れ、洗濯の回数、屋根替え仕事など今振り返れば汚いわけだが、不潔、不衛生というような意識は当時はなかったということを表明している。

事例10 「この頃、家に帰ればすぐに風呂に入れるものが出回っていて、勧められた。水を取り替えないですますことができるお湯の循環装置で、20万から30万ぐらいするもので、便利だとか言っている。昔のタテッカエシのようなもので、その都度に湯を捨てて新しい湯を入れたほうがきれいだと思う。戦前、そして戦後のしばらくの間も大便の後と食事の前に手を洗うか洗わないかが、不潔とか不衛生と言われる境目のようなものだった。それほどにどうこう言われるようなことではなかった。生活に追われていたからだと思う。ただ、学校では昼飯の前に手を洗うことは昔も行ってた。井戸端で手を洗うことが義務づけられていたし、行列ができていた。風呂の水は毎日、私の家では取り替えていたし、大雪の降る日などには取り替えなかったことがあったが、仕方がないと思っていたし、それでも汚れていて嫌だったという気持ちはあった。下肥は、麦や野菜に肥料として使っていたころ、汚いと思っていたが、あれ以上の手はなかったと思う。汲み取り便所は近所では今も大分あるが、私のところでは20年以上前に母が亡くなったときに、都会に住む妹の子が「田舎のトイレは汚い」と言って泊まってくれなかった。その後で大きな浄化槽の水洗トイレにしたが、汚いと言っていた子どもたちもきれいと言って驚いていた。戦前だって海軍の一級官舎は水洗だった。帰省して、自分の家の便所は汚いと痛切に感じたものだった。食事は箱膳だったから茶碗は何日も洗わないで、箸と茶碗は箱膳に入れておくものだった。妻も嫁入りには箱膳一組を持ってきた。戦中のころ、夏ともなれば、子どもも低学年のころは、男女とも上半身は裸で、首のまわりには垢がついている者もいたし、女の子では、「シラミの佃煮」なんてあだ名を付けられたシラミだらけの子もいた。軍隊にもシラミがいて、海軍航空隊に何日か寄宿したときに、シラミにたかられて、その痒い体験は今でも忘れられない思いでとなっている。(昭和7年生)

*「田舎のトイレは汚い」という感覚は話者自身の海軍の一級官舎での水洗トイレの経験と身内が暮らす都会の視線によって確定されていく。汲み取り式便所は不潔だという感覚が軍隊経験と都市生活者の指摘から生まれている。

事例11 「昔と今ではお話しにならい程の差があって、昔育ちの我々は今でも用足しをした後にその都度、手を洗うこともしないで平気でいて若い者を見ると不潔だと見られているだろう。昔は学校でも用足しをした後に手を洗えなんて先生も言わなかった。第一、手を洗うところがなかったのだから、おそらく先生だって洗わなかったと思います。校庭の隅に井戸があっただけですからね。便所は臭くて、夏には蛆がウヨウヨしていて、今から思うと随分汚いと思うが殺虫剤もなかった時代です。風呂水だって、毎晩は取り替えないで、一日おき、つまりタテッカエシの風呂水で戦争中に東京の従妹が疎開して来たので、風呂に入れと言ったら、田舎の風呂は汚くて入れないと着物をまくって足だけ洗っていたことがあった。食事の衛生面では、個人個人の膳箱があり、自分の食器は自分の膳箱に入れておくのですが、食事が終わった後に茶碗を洗わないで舌でなめて膳箱に収めてしまっただけで何日も茶碗を洗わなかった」(大正11年生)

*手洗いと風呂と便所と膳箱が不潔を語る上の項目となっているが、とりわけ東京の従妹の風呂での行動が、農家の風呂の不潔さを家族に感じさせたことだろう。

事例12 「農家では便所と流しが汚いところの代名詞であった。それが話題となったときは必ず、その家の女の人の評価となっていた。農家では屋外に便所があったが、それは下肥は農家の重要な肥料だったから汲み出すのに便利であるように屋外にしてあった。昭和20年以前の農家の家族の構成は、大家族だったから、性交為だって親、兄弟、子どもに神経をつかっていたから、風呂に入ってからするようなことなどとても考えられなかった。風呂に入らない晩もあったから、今の感覚では到底考えられない。農家の風呂は炊く時間と薪、木の葉、藁など燃料の節約から毎日のように風呂は沸かさない。タテカエシの風呂だから幾晩も同じ風呂に入る。井戸との距離のこともあって、一週間から十日くらい経たないと水を替えない家があった。不潔と言えど不潔だが、このような状態が当たり前であったから不潔と思ったことはなかった。洗濯も時間的な余裕が少しもなかったので明るい中は仕事、仕事であったから身の回りの洗濯など月に二、三回あれば多い方であり、今考えれば非常に身の回りは汚れていてきたないものであった。母にかまってもらえない子どもは汚い身なりで惨めであった。風呂に入れない子どもの手足はヒビ、アカギレで惨めだった。とにかく、都会暮らしは人が多く外聞が悪いからきれいにするが、田舎では隣近所の人だけだから、汚れていても外聞もなく、それが当たり前であったから、生活の上では苦になることはなかった。」(大正13年生)

* 性行為は清潔とか不潔というような範囲で語られることはなかったし、節約第一では風呂だって、タテカエシが当たり前であったことが理解できる。汚れは、他者との関係で実体化される感覚で田舎では外聞もないから汚れも汚れとして意識しないですんでいたことが示されているようだ。また、汚れは女性の評価と結びついていた。

さて、以上が不潔をめぐる事例の提示であった。こうした事例をどのような視点で解いていったらよいのか、ということでは、『境界侵犯—その詩学と政治学』(ありな書房、1996)(註1)が役立った。とりわけ「都市—下水、眼差し、そして汚穢と接触」と題する[第三章]は、新興のブルジョワの上品さ(リスペクタブル)の一つの表象として、清潔が解読されていくように感じたしである。

ここに列挙した言説はそのままこのフィールドの衛生観念の変化を表象したものというふうに位置づけにくいだが、不潔という意識がどのような足取りの中で誕生してきたのかを探る方向だけは見えたと思っている。

事例1では、不潔なムラから清潔なムラへとゆるやかに変換していく手立てとして衛生役員らの巡視が採用されていたことが判明している。行政といういわば優越したところから、検査され、家の隅々まで通り抜けていった視線から選び出された模範の家とその標示は、清潔と不潔の線分をしっかりと描いていったわけである。一方、家々では巡視前の家の大掃除をハレ的な年中行事として把握し、できるだけ清潔にしてマレビトとしての衛生役員らを迎えている。不潔なムラから清潔なムラへの移行は、衛生的な監視行為と大掃除という民俗行事との融合によって成し遂げられていったわけである。

また、事例8、10、11見られるように都市に暮らす親戚という他者の訪問と発言によって、潜伏していた不潔はいよいよ「不潔」として照らされることになる。この身内の造反によって、田舎あるいは実家として農家の不衛生の拠点が風呂であり、便所であることが指摘されることになる。

不潔の誕生は他者という眼差しの存在が不可欠ということである。便所が怖い、臭いという指摘や、風呂には入らずに足だけつかったという出来事は、自らの生活様式を見直すより方法のない、都市からの圧力であった。

事例3は、その逆で都市に出ていった学生が、学生に長い間のムラの生活で装着されていた行為形式が、周囲の眼差しによって「きたない」とか「不潔だ」というふうに烙印を押される事例である。これまた、田舎と都市の圧倒的な力関係から、自らの生活体験や信条に基づいて、こういった生意気な批判に反撃するようなことは決してなく、ノイローゼ寸前まで追い込まれながらひたすら、自らの生活様式を変換させながら、たんに一つの形式にしか過ぎない「清潔で上品なお行儀とかマナー」といった類いを学んでいったわけである。清潔（先輩）がどのようにして不潔（後輩）を襲ってくるかのいい事例だといえよう。また、この事例ではムラには術語としてダラシガナイという基準があったこと、「ぼうふらが湧く」とか「蛆が湧く」といった会話が交わされており、清潔、不潔にかわる評価項目が溜めと流しに向けられて存在していたことも分かっており、今後の調査の指針となるものが多く含まれていた。多くは風呂（タテッカエシの話題ばかりで、今流行の24時間いつでも入れる風呂をタテッカエシと評価して嫌っている点も興味ふかい）と便所だが、膳箱での食器の扱いや洗濯（註2）と着替えの話題であっても、共通しているのは、こういったことが不潔であったという感覚は、当時はなくて、今振り返っての評価という点であった。清潔だと解釈され、評価される領域が増えれば増えるほど、昔は不潔だったという領域も増えていくように思われた。清潔の感覚と不潔の感覚は都市（他者）と農村（身内）の力関係が反映した感覚差といってもいいと思われた。清潔は進歩のメタファーとなり、不潔は伝統的遅滞のメタファーとなっているが、これではあまりに平凡の解釈だ。もう少しこの線分の引かれ方には注目してフィールドデータを積み上げていきたいと思っている。

2 時間感覚の変化

さて、ここで扱う時間感覚という語彙は、時間の流れという意味ではない。不可逆的に進行していく時間の流れ、それからまた今年もクリスマスがやってきたというような円環的な時間の流れといったものを扱っていない。もう、誰の側にも小さくなった時計が身体と一部として取り込まれている今にあって、あるいは時間管理ができない人があまり評価されない時代にあって、定刻とか遅刻という意識がこのフィールドでどう語られてきたのかを報告しようとするものである。また、労働の時間についても一日八時間という基準が行き渡りにくい時代にはどの程度の時間が働く時間として認識されていたのかを報告することにした。刑務所はもとより、軍隊、学校、病院、工場など時間管理（時間配分）が行き届いた近代以降にあって、それぞれの地域、職場、個人の単位で〇〇時間という、建前とはズラシタ時間を持っている。調査地での時間について、何が描けるのか試みてみたい。

大谷木ムラで農業を営むYさん（昭和8年生）からは「地域の集まりでは偉い人は時間すれすれ、もしくは若干遅れ気味の出席だったが、最近はむしろ逆のようだ。昔は寄り合いの時間は農作業の

都合であり守られていなかった。集まりの内容より、自分の仕事を優先とする農家が多かったから時間が守れなかったと思う。今では専業農家が少なくなりサラリーマン家庭が増えてきて、ほぼ定刻に集まって集会は開催されている。この辺りでは四日市の寄合という言葉がある。坂戸の四日市場は働き者の多い部落として知られていて、それだから、寄合の集合時間はどうしてもルーズとなり、四日市場では一時間遅れは普通だと言う噂みたいなものがあった。だから、あまり重要でない寄合のときにはこの大谷木でも四日市場の寄合だから、と言って遅れて行った人がいた。それでも昭和30年代ぐらいからはだいたい定刻に集まって寄合が行われている。」などというお話を伺うことができた。

時間厳守それはとりもなおさず遅刻意識の誕生（あるいは形成）という問題でもあり気がかりテーマとなったしだいである。まあとにかく時間感覚を調べるために、さらに寄り合いの集合時間の様子を聞いてみることにした。

滝ノ入のYさん（大正11年生）は「昔の時計はゼンマイ巻のものが多かったからゼンマイ巻が遅れて止まるのがしばしばあって、隣りの家に聞きにいたり、来られたりであった。柱時計は外から入って来て一番見やすいところにかかっていた。部落の集まりに十分や二十分遅れても気にしなかった。時間厳守というようにはいかなかったのであまり気にしなかった。家の時計が十分遅れていて、遅れてしまったというようなことを述べれば誰もがあまり気にしないで受け入れてくれた。なかには誰々さんの家の時計はいつも遅れているから、遅くなるよ、というような会話がときたまはあった。私の家の屋号は板屋と呼ばれていたが、昔の家には大きな門があって、奉公人が朝早く起きて門を開く音が近所に聞こえたそうだ。すると、板屋の門が開いたから、というふうに近所の家々も起きたそうである。時間的には何時だか聞いていないが、門を開ける音が近所の起床の時間ということになっていたそうだ。また、板屋は昼飯が遅いことでも知られていて、板屋の八つ昼めしと呼ばれ遅い昼めしで近所では有名であったそうだ。」ということを書いてくれた。

「ラジオのない昭和の初め頃はどこの家でも時間を合わせる標準がなかった。時計が止まると、隣りの家に時間を聞きにいった、教わった時間に時計を合わせていた。お寺の鐘に合わせてたり、磁石を使って太陽が真南になったときを12時にしたり、暦に出ている日の出、日の入りに合わせて時刻を合わせていた。だから、昔はそれぞれの家々で時計の時刻はみんな違っていった。寄り合いなどでは、俺らが時計じゃ今何時だったというわけであった。寄り合いの時間だが、昔は何日の早夕飯集合（早めに夕飯と食べてから集まる）というのが普通だった。だから、遅い人、早い人では30分ぐらいの差はあった。ラジオが普及しはじめたのは二・二六事件があった昭和11年ごろからだった。その頃から家々の時計も正確になっていった。時間はそれからしだいに守られるようになった。」と沢田のOさん（大正5年生）は教えてくれた。時間感覚の変化にはラジオの普及による時計の正確性の向上という要素が関係していることがよくわかったしだいである。

「毛呂山時間というより、田舎時間と言った方がいいかも知れない。当時、部落の集まりである寄り合いはほとんどが夜であった。そのため30分遅れるのは当たり前の方で、一時間後にはじまることもめずらしくなかった。集まっても世間話が多く、本題に入るまでかなりの時間がかかった。はじまっても議題に対する原案はなく、どうしようが話のはじまりであった。問題が投げかけ

られるとあっちでゴソゴソ、こっちでゴソゴソと話しがはじまり、しばらくしてから口利きという人たちが口火を切る。すると、これに対してヒソヒソ話となり、幾人かの口利きがボソボソと相談して、これでどうでしょうかということになる。やっと一つの答えが出て、それからまたしばらくは世間話で、口利きが、この辺りで終わりにしたら、という一声でやっと終わりになった。五分で終わる話しが延々と二時間もかかる 때가あった。どうせ時間にははじまらないということで誰もが承知して30分遅れで出てくる。話し合いもはじめから、どうしましようだから年寄りが口を利かないと終わることはなかった。これは寄り合いだけでなく、冠婚葬祭の集まりでも同じであった。お祝いは式場を借りてやるようになってから、葬式は火葬になってから、火葬場の時間に合わせるようになってから集まる時間が正確になってきた。それから、毛呂山時間が定刻通りになっていったのは30年ぐらい前に町長が集まっても集まらなくても定刻に始めると宣言してからだと思う。家々の時計はラジオと高萩（となりの日高市）の正午のサイレン（この辺りでは親しまれていた）で調整されていた。家の時計はいつも、オフクロが30分進めておいた。姉が女学校に行く時間に遅れないようにと、すべて30分前に準備が出来るようにという心遣いだったように思う。時計はだいたいボンボン時計で、遠くからも見えるように大きな掛け時計であった。時計を掛ける場所は寝ていても、昼間に仕事から帰って来ても土間から見える場所が選ばれていた。私の家では中屋敷の間柱に掛けておいた。土間からも見えるように障子は細目に開けておいた。時計も日巻き、三日巻、七日巻などがあったが、どれも振り子がよく見えるものがよかった。振り子の様子で時計の診断がついたからである。時計を巻くのは子どもの仕事であったが、七日巻時計となると最後の何回かのゼンマイ巻は子どもの力では巻切れなかった。ボンボン時計では音の様子で時計の状態がわかった。音がゆるくなると、時計がかつたるなくなったからゼンマイを巻いてやれ、ということでゼンマイを巻いた。振り子の長さの調整は男（大人）の仕事であった。進みと遅れを最小限に微調整したものである。あそこの時計は正確だ、と信用されると自慢も出来た。ボンボン時計の鳴る音は深夜にはよく響いたものだった。朝五時を打つと、オフクロが起きる。男はそれから一寝入りして六時ごろに起きた。」以上が大類のHさん（大正15年生）のお話である。昔の寄り合いを支配していた時間の質の問題、時計と暮らしとの関係、男の時間と女の時間（夜が明けると早めに起きて食事づくり、それから家中が起きて食事。野良が忙しくなると夜が明けのを待って出発だから、もっと女は早起きだった。女は野良でも大活躍だから、主婦とか専業主婦という身分が誕生したのは本当に最近のことだ）の差などが明らかになり、参考になったしだいである。

前久保のIさん（大正6年生）は「私が部落の行事に参加するようになったのは、終戦近くで公会堂も出来ていた。当時は若い男はほとんど出征していて、老人や婦人が集会に出席していた。時間はあまり守られていなかった。戦後は軍隊経験者が多く出席して、時間には厳しくなって守るようになっていった。戸数が増えてだんだん若い者が出席するようになってきたが、勤め人が増えて、昔の農家の集会とちがって欠席者が多い。特に最近は半数にも足りない。それでも多数決で決めている。昔は《四日市場の寄り合い》という言葉があつて、物事を決めるときに意見を尋ねると、誰もが皆さんしだいで結構です、と言うので議事が簡単に決定していく様子のたとえとしていた。」とのことであった。岩井のSさん（大正7年生）は寄り合いの時間については「10年ぐらい前から

団地の若い人たちが参加して旧住民の高齢者層が減少するようになってから時間厳守になった。旧村の集会では、集会に酒や食べ物を持ち込むような人がいて、この人たちは時間を気にしないで遅刻しても上座に座りたがる。偉い人というわけではないが。旧村の集会では上座を空席にする部落もあるようだ。」と説明してくれている。

まあ、聞いたかぎりでの感触だが、昭和30年～40年ごろまでは遅刻は個人の都合で止もう得ないという考えであった、やがて、遅刻はだらしがないという意識が芽生えてきたのでは、と思うのだが、このあたり正確かどうか。もう少し多くの人たちの記憶を重ねていかななくてはと思っている。つぎに、Oさん（大正5年生）のお話しにもあったように、時間意識の変化は時計と深い関係がある。時計と言えば柱時計と懐中時計、そして腕時計（この町では昭和10年前後から普及しはじめたようだ）であった。それから、野良仕事や山仕事での空腹感を頼りにする腹時計、太陽の角度や影の長さや角度、仕事のはかどりを見て決める日時計も生活時間を管理する重要な時計であった。晴れた日は日時計、曇りの日は腹時計であったそうだ。

なかでも懐中時計は、医師、教師、大口山林所有者、オダイジン（豪農）、豪商、村長さんなど公職の人、工場の現場監督の人などが所有しており、特定の階層（時間を管理する人たち）の人たちのシルシと理解されていたことが興味ふかい。腕時計は成人式を契機に身につけることが多かったそうである。前久保のIさん（大正6年生）は「大正時代でも農家の6～7割ぐらいの家には柱時計があった。ゼンマイ式時計だったので止まったときには近くの家で聞いてきて時刻を合わせた。太陽が回ってきた方向を見て、あるいは温度とか明るさで時刻を判断するようなことは行われていた。また、鉄道が昭和初期に開通したので駅で時間を合わせたりした。昭和12年に隣りの家で部落ではじめてラジオが入ったので正確な時間を知るようになった。柱時計は台所、土間から一番よく見えるように大黒柱が多かった。腕時計は昭和のはじめから普及しはじめた。」という。大谷木のYさんは下大黒柱、表座敷の東向いの鴨居を柱時計の伝統的な位置としている。いずれにしても柱時計の位置というのは時間意識を考える上では重要な問題である。

最後に農家の労働時間の感覚について述べておきたい。川角のKさん（大正11年生）が「農家じゃだいたいオテントウサマしだいの生活で、初夏（5月）から晩秋（11月）にかけては早寝早起きということであった。」という言うように、昼寝の時間もあるが日の出から日の入りまでが農家の仕事時間の基本であった。夏場は夜の10時には就寝していて、午前4時には起きていた。冬場は午後8時に寝て、朝5時起床が一般的であったから、とても今日でいうところの労働時間意識というものはなかった。ヨナベ（ヨナベ仕事は何時間働くということではなく予定の仕事が片付けば止めていた。）だって夕食後に少し休憩を入れてから一時間ないし二時間程度というわけだから、働きどうしで、とても何時間働いたというような意識はなっていなかったことが判明している。むしろ、農作業の進み具合で仕事を止めたり、続行したりしていた。ただ、岩井のSさん（大正7年生）が「地主層の人は作業員に賃金を支払わなくてはならないので、労働時間に対する意識が強かった。」ということを述べてくれた。

阿諏訪のKさん（大正13年生）も「時間のことはあまり言わずに作業の都合で早く始める日もあり、時期によっては夜中まで働いた。特に養蚕の時期には大変であった。私の母は農閑期にも縦糸

の巻き返しの賃仕事をしていたので、子どものころ、母親が就寝する時間を知らなかった。」と家の時間を述べてくれ、さらには「あの田を一日で植えたとか、一日で畑を掘ったとか言われていたが時間は言わなかった。きつい作業だと無理せず早く止め、軽い片付けなどは翌日にしていた。しかし、人夫が来ている家ではかなり頑張る家もあったと聞いている。」というふうに振り返ったくれた。玉林寺のKさん（大正13年生）によると「他人を雇っての野良仕事の時間は、約十時間が目安」というふうに意識されていたようだ。ただし、サクダイ（小作料の代わりに地主の家で奉公して働く人たち）経験者はもっと働いたと以前に筆者が西戸のAさん（明治42年生）から聞いたことがある。どうやら、労働時間は人夫を雇っている人たちには意識されており、一般的な農家ではとくに意識されていなかったというのが少し前のこの町の実情であった。昭和初期から機織り工場を営んでいた前久保のIさん（大正6年生）は「当時、娘さんは全部住み込みで、家族の一員として一緒に生活をして働いていた。小学校6年を終えると2年または3年ぐらい年季といって給料は年間で決めてあり、盆暮れには仕着せといって下駄、足袋、反物などを支給していた。給料は親が前借りで持っていった。年季が終わってからは、年間いくらで決めて嫁に行くまで住み込みで働いていた。時間は朝7時より、午後7時まで実働では10時間で第一と第三の日曜日が休日であった。それから正月休みが8日間、盆が5日間、その他には春と秋の祭りのときが休みであった。」という事で10時間を一日の労働時間として理解していたことを述べてくれた。さてこれからの仕事だが、あそこの家（あるいはあそこの部落）は早起きの家だったとか遅くまでよくヨナベをするだったといった評判の家（部落）をめぐるエピソードを集めることと、「畑うないはヤッコジで一日に五畝、カタジでは三畝、ソダ作りは一日で20束」というような一日の農作業の目安を精査していきながら労働量の目安を拾っていくことだと思っている。農家の時間感覚はヨナベと早起きの伝承を解釈することで、あるいは一日仕事という農家の労働の目安も具体的な事例を重ねていけば説明できるかと思っている。また、野良仕事の手伝いを依頼する側（オダイジン）の時間意識も聞いておきたいところである。

ただ、時間感覚は勤勉（働き者）あるいは怠け者という評価項目と結びついており、時間感覚という感性をうまく取り出すには広汎な目配りが必要だなど思うしだいである。

それから、四日市場（坂戸市にある）という少し離れたムラに対する評価がおもしろい。前述したように前久保と大谷木では四日市場に与えられた評価内容が違っているのだ。その後の調査で玉林寺と沢田、そして長瀬では「寄り合いで、自らの意見を述べないで皆さん次第、言って意志表示をしないこと」の意味に四日市場の集会というたとえを用いていることが判明している。「昔はダイジンコの意見がまかり通って、貧乏人の意見は通らなかったから、皆さん次第でということなかれ主義になっていたんだ。」とか、「四日市場の人は人が良く、皆さんが良ければ結構です。皆さん次第で、まとまりが良く、決め事が早い」とのことであった。

滝ノ入は大谷木と同じように、定刻が過ぎても会議がはじまらないことのとえとして四日市場の寄り合いを用いている。四日市場に出向いて、地元ではどう解釈しているのか聞いてみたい。興味ある世間話のテーマである。

さて、定刻と遅刻について考えてみる。これもまた、定刻が要請され（どこから要請されてきた

のが問題だが)、徹底されいわゆる時間の規律化がこのフィールドでも進んできたことが確認できた。定刻遵守が町長から発令されたり、帰郷した兵隊さんから時間厳守が提案されたり、都会に働きに出るサラリーマン世帯から暗黙のうちに要請されたりで、従来の時間感覚は生きる場所を失いこの町の寄り合いの開始時間は定刻化していった。また、時間を知らせる正確で狂いの少ない時計の普及によって、それぞれの時間が消えうせてしまい、共通の時間となってしまったことも大きな要素だと思われる。これによって、集まったところではじまる、という待ち時間が失われていくことにもなった。定刻開始の要請と遅刻意識の誕生、これまた都会（近代）と田舎（伝統社会）の差異を際立たせる項目だったのかも知れない。

おわりに —今後の課題—

不潔という感覚あるいは不潔として清潔から区画してしまう政治的な力学について、遅刻意識の誕生する時刻や時間感覚の変化について少ない資料を提示しながら簡単な報告をしてきたわけだが、「感覚のフォークロア」と題する以上、もっと広汎な領域で感覚（触覚、嗅覚、味覚など五感を駆使して）を扱わなくてはならないと思っている。ただ、特定の感覚というものは社会的に築かれたんだ、なんていうおきまりの方向に流れていくのではあまりに意味がないというもので、しばらくは失われつつある感覚群と生き延びている感覚群を調査から掬いにとって検討してみたいと思っている。

ところで、今回は間に合わせる事が出来なかったが筆者は匂いという課題でもフィールドデータを集めているところである。とりわけ「失われた匂い」の確認とそれがどういうふうに評価され、どのように記憶され語られてきたのかということに関心を抱いている。匂いが生活場面でどういう位置にあったのか、年中行事ならぬ、年間の匂いと評価の暦を作成することも課題としている。

つい最近になって、久しぶりに伊豆七島の一つである新島を訪れた。新島といえば、「くさや」という名産品があり、筆者がはじめてこの島を訪れた昭和40年代末には、このくさやの匂いが充満していた。五十集（いさば）衆と呼ばれるくさやの製造業者は庭狭しとばかりに、くさやの汁に浸けたムロアジやアオムロ、トビウオを天日に干していた。筆者には異臭という感覚でこの匂いと戦っていたが、やがては慣れてしまい島ならではの匂いと解釈し、敵対するような感覚ではなくなったことを覚えている。島の人たちには、当たり前だが永年にわたって慣れ親しんだ匂いだから、とくにクレームというものは聞かなかった。ところが、近年は観光客を招く民宿の人たちから、観光客が嫌うという理由から、町中で行うくさや加工について住宅地から離れたところで仕事をしてくれという要請があり、主だったくさや加工業者は共同加工所を人のいないところに作り、町中でくさやを干すような光景はなくなりつつある、というわけだ。くさやの匂いは異臭と扱われ、周辺地域に排除されつつあるという。くさやの匂いも受容されにくい時代になったのである。

さて、調査を実施している毛呂山町での「匂いの様相と評価」に関するデータだが、「家畜は何を飼っているか、わかるほどにそこの農家の家族全員に匂いが移っていた。豚の匂いは戦前は残飯を与えていたからすっぱい匂いがしていたが、戦後は配合飼料を与えたから、甘っぱい匂いがした。肥育豚は飼料が濃厚だったのでとくにくさかった。豚小屋の匂いも強くて近くのを道を通るときは車

であれば窓をしめたし、息を止めて通り抜けたこともあった。ヤギのメスを連れて種オスのところに交尾のために連れていくと強い匂いがしていた。種オスを飼育している家は、種オスの匂いが遠くまで匂ったので、よくわかった。ヤギのオスとメスは匂いがすごくちがっていた。牛は乳牛がくさかった。馬は馬糞も家畜のなかでは匂いはやさしいほうであった。にわとりは鳥小屋で地面で飼っていたときは今の養鶏のように匂うことはなかった。夏の養鶏の匂いはすごい。大麦の脱穀は長いトゲが穂にあるからチクチクとあっちこっちが痛くてつらいものがあった。埃っぽい籾の匂いを覚えている。小麦の藁はいろいろと利用できるのに、束ねてとっておくが、管理が悪いと中からカビて、紐を解くとカビくさいむっとする麦藁独特の匂いがしていた。」(昭和20年生) というような資料となって提示されてくる。家畜の匂いの微妙な違いや、すでに嗅ぐことのできない匂いもあって、表現していくことは難しい。「麦刈りして、畑にひろげて乾燥、それから脱穀だが乾いた麦稈の匂い、脱穀してから天日の筵干しのときなど、手にとって嗅ぐと大麦と小麦それぞれの匂いがした。」(大正5年生)「麦蒔きには堆肥を施したが、前の晩に堆肥と金肥を切り返して、明日の用意をしたが、堆肥の熱気と蒸気で心地よい匂いがしました。」(大正4年生)「大麦らしい匂い、小麦らしい匂いを取り入れのときに感じた。麦を乾燥した時はなんとなく暑そうな、こげるような匂いがした。麦を脱穀したときはほこりっぽい匂いがした。大麦の粉と砂糖を混ぜたコガシはこうばしい匂いであった。」(昭和6年生)「小麦を脱穀した後に麦からを束にして積んでおくが、この上にゴロツと横になると乾いた麦カラが鼻に心地よかった。小麦のカラは色々と遊び道具になった。長くつないで井戸の中の水まで届くようにして、チューチューと水を吸い上げて飲んだり、つなぎながらドドメカゴ(熟れた桑の実を入れる籠)をつくりました。きれいに丈夫につくるのが競争だった。小麦のカラで人形や箱をつくって遊んだ。大麦も小麦も熟れると独特の匂いがした。雑木が一揃いに芽吹くころに穂ばらむ麦の畑のさく切りするが、作業中の風のさわやかさは格別だった。種を蒔くときのニオイは大麦と小麦では少し違っていた。ただ、種そのものの匂いではなくて、種を保存貯蔵しておいた袋なり器なりのそのものが大方の匂いであった。種を蒔くとき、昔は堆肥の匂いが一番濃厚だった。完熟した堆肥はカビ臭い匂いであまり強い匂いではなかったが完熟していない堆肥は発熱していて、臭気も強かった。甘酸っぱい匂いであった。収穫のとき、大麦は小麦より刈り取りが早く、穂を落とした後の麦稈でどどめ籠をよく作った。この時の匂いが大麦稈の特徴で、うす甘いような感じだった。」(大正3年生) こんな具合に独特(と感じる)の匂い、香ばしい(と感じる)匂い、心地よい(と感じる)匂いなど、匂いの様相もその時代の文化の中にあるもので、その時代にそれなりの評価をもらいながら嗅覚で感じ取られてきたものである。いい匂いと(解釈されて)感じた時代とそれが異臭と解釈されて排除されてしまう時代、匂いの区分けもその社会の文脈の上で構築されたものに違いないという漠然とした思いから、基礎的な感じられた匂いとその評価をめぐる資料を今少し集めていきたいと思っている。

(註)

註1) 第三章では、「パークの著書において、清潔と不潔、純粹とを不純とを隔てる境界は、キリスト教と異教、文明と野蛮との間に存在するのである。」とか「チャドウィックは、スラムを下水に、下水を病気に、そして病気を倫理の頹廢に結びつける。」とか「治安維持と衛生とがうまくい

くためには、今度は感覚の改良が必要となる」とか「あらゆる臭いは、もしそれが強烈だと病気を惹き起こす。(途中略) あらゆる臭いとは病気そのものなのであると言うことができよう」とか「ある点では、臭いも階級差を表わす媒体としてつくりかえられた。」といったふうな不潔と臭いに関する元気な記述と出会うことができ、筆者などは考える上でのヒントをいただいたように思っている。

註2)「昔は山から枯木を集めておいて、それを燃やして毎晩毎晩ご飯を炊いたり、お湯を沸かしていたから、木灰はいつもありました。糠は、米糠で農家のことだからいつでもありました。灰や糠を使つての洗濯はだいたい男の方の農作業で身に着けたものが多かった。別に何日着たからというわけではなく、何日も着て、本当に汚れがひどくなったら洗ったのです。一回に三、四枚ぐらい前夜のお風呂の水を盥(たらい)に汲み取って、衣類が十分につかる程度に入れて、その上に灰とか糠を三つかみか四つかみぐらいを適当に振りかけて揉み混ぜておくようにして、半日ぐらい時間をおいてから、念入りに揉み洗います。糠は汗とか体臭が取れました。それからすすぎは下の小川の流れてよくすすぎ洗いをしました。洗濯では男物と女物は区別しないで一緒に洗いました。ただ、白地類は除いておきました。洗濯の種類は手もみ洗いと洗濯板でごしごしする程度で今のよう、毎日するわけでもなく、暇のあるときに(だいたいお昼休み)に洗濯をしていました。一年中で洗濯をしない日は、元旦だけだと思いましたが、一月十六日八月十六日は罪人でも許されるとかで、幾分仕事を休みました。灰を使つての洗濯は昭和十年過ぎまでは行われていました。」(明治42年生)このような、洗濯をめぐる調査は清潔と不潔の区分を考えていく上で、必要だと思っている。

註3) 時間感覚という課題を設定していたとき、偶然にも大宮小児保健センター(小児医療センターという名称に比べて、なんとソフトなんだろう。)に勤務されている奥山真紀子さんからアラン・コルバン著(小倉孝誠・野村正人・小倉和子訳)『時間・欲望・恐怖—歴史学と感覚の人類学』(藤原書店、1993)を紹介された。本論のタイトルである「感覚のフォークロア」は、この本の表題からいただいた。「『時間』の誕生—時間管理と規則化—」という題の小論は無駄な時間を過ごしたな、といった感覚や自由時間の扱われ方とか暇な時間を過ごすことに抵抗を覚えてしまう感覚などは、歴史的に形成されてきたことがよく理解できた。時間を有効に使おうというような発想だって、そんなに昔からあった考えではないことがわかり、ほっとした気分になった。時間感覚は社会的な地位に応じて存在し、階級によって不均衡だった時代ってつい最近まであったんだ。